

戦時性暴力／日常の性暴力

——南京ワークショップからの報告——

村本邦子

1. 戦時の暴力と日常の暴力はつながっている

臨床心理士として20年間、虐待、性暴力、DVなど、女性と子どもへの暴力の問題に取り組むなかで、避けて通れない問題の根っこは、過去の戦争加害という負の遺産をどう捉え、向き合うのかということにあるのではないかと考えるようになった。トラウマ研究の分野に、「世代間トラウマ」という概念がある。ホロコースト、第二次大戦、ジェノサイド、ベトナム戦争などについての研究があるが、マスレベルのトラウマは、家族システムを通じて世代間連鎖し、社会全体が病んでいくというものである。個々のケースを通して、子どもの問題を遡ると、親世代の暴力、そしてもう一世代遡ると、多くの場合、戦争という集団レベルの暴力に行き着く。

敗戦後、戦地から帰ってきた青年たちは、後を振り返らないよう大慌てで結婚し、たくさん子どもたちが生まれた。想像を絶する非人間的な経験を抱えてしまった男性たちに、どのような家族を作ることができたのだろう。こうして次世代が育てられ、さらに次の世代が育てられている。抑え込まれたトラウマは、再体験、麻痺・回避、過覚醒という症状をもたらす。再体験の例には事欠かない。「戦地から帰ってきた父親は、毎晩のように悪夢にうなされていた」と語る娘たちの証言をたくさん聞いた。上の世代の女性から「戦地から帰った兵隊さんは、みんな家で暴力をふるっていたのよ」と耳打ちされたこともある。こんな例も見つけた。戦後間もない頃、死刑になった小平義雄という連続強姦殺人犯がいた。彼は、調書のなかで、「上海事変当時、強姦のちょっとすごいことをやりました」と聞くに耐えない強姦強盗の証言をしている（本田、1997）。これらは、まさに再体験、および再演である。

自分の感情とつながっておらず、家族と絆を結べない男性たちの麻痺・回避は、そのまま日本人男性の問題ではないか。それを補うかのように、過労死するまで働き続け、奇跡的な経済復興を遂げたのは、まさに過覚醒によるものではなかったか。

2. HWH (Healing the Wounds of History) を使った南京ワークショップの取り組み

このような問題意識から、戦争加害による世代間トラウマに働きかける可能性を探ってきた。今回は、2009年に南京で行ったワークショップについて報告したい。このワークショップは、ドラマセラピスト Armand Volkas によって開発された HWH (Healing the Wounds of History) の手法をもとに実施された。Armand はアウシュビッツ生存者の息子であり、この手法をユダヤ人とドイツ人、パレスチナ人とイスラエル人ほか、さまざまな葛藤を抱えるふたつの集団に応用してきた。HWH は、①タブーや沈黙を破る ②お互いを集団としてではなく、一人一人が独

自の物語と顔を持つ人間として見る ③自分の中の加害者になる可能性に気づく ④深い悲哀の体験 ⑤パフォーマンス、儀式、追悼などの統合・表現と共同作業 ⑥社会的奉仕や創造的活動への変換という6つのステップから成る。多くの歴史教育や平和教育が、戦争の「客観的事実」の記憶に重きを置くあまり、事実を伝えられることによってもたらされる様々な感情を置き去りにしてきた。Paul Connerton (1989) は、集合的記憶が文字よりも身体経験や儀式などを通じて伝達されると指摘しているが、ドラマセラピーという体験的心理学によって文字では記録されない社会的記憶を扱おうとするものである。

報告者らはこれを日本の戦争加害に応用し、2007年、2008年、京都やサンフランシスコで試みてきたが、2009年10月には、中国南京にて4日間にわたるプログラムを実施した。南京大虐殺は英語で“The Rape on Nanking”とも呼ばれ、残虐な性暴力で知られている。参加者は中国と日本の学生を中心に25人であったが、慰霊などパブリックイベントを含み、そのプロセスの一部は公開された。詳しい報告をする時間的余裕がないが、性暴力に関わるエピソードを紹介する。

セッションの2日目、中国人女性ファ（仮名）が、田舎の母親から電話があり、村に住んでいたおばあさんが亡くなったことを聞いたと涙ながらに話してくれた。政府とトラブルを起こした息子たちのことが心配のあまりか、全身真っ青になって亡くなっているのが発見されたという。おばあさんは南京で日本兵士たちによる集団レイプを受けたとささやかれ、村人達から避けられていた。子どもだったファはおばあさんに近づきたかったが、おばあさんは心を開かず、2人の間には「まるで壁があるよう」だった。これをサイコドラマとして再現した。3人の参加者が、カラフルなスカーフを持って壁となった。壁は戦争やおばあさんのトラウマと羞恥心を象徴しているようだった。おばあさん役が壁の向こうに立ち、ファは敬愛と哀しみの気持ちを込めて彼女に語りかけた。シンプルだが感動的な対話が行われ、2人は抱き合った。後のシェアリングで、日中の参加者が癒しの瞬間の証人となったことの感動を分かち合ったが、他方で、祖先たちの蛮行が今なお中国の若い女性たちに与えているトラウマの深さが私自身の身体に刻み込まれたような気がした。

3日目は幸存者（生存者）常志強さんの証言を聞いた。常さんは9歳の時、目の前で日本兵に母と弟を刺し殺され、傷ついた姉は眼の前で強姦された。常さんの話は感動的であると同時に、体験を消化するのが難しいものを含んでいた。ファシリテーターは「人間彫刻」を作成することを提案した。5人ずつのグループに分かれ、参加者のそれぞれが残りの4人を使って自分のイメージの彫刻を作り、タイトルをつけ、簡単な説明とともに全員の前で発表し合った。一人の中国人女性は「慰安婦」をテーマに彫刻を作り、両足を開いて強姦されている女性の役として私を選んだ。彫刻ではあったが、私の眼からポロポロ涙がこぼれるのを見て、その女性は「ごめんなさい」と言った。私は、「辛い体験だったけれど、日本人である私に被害者の立場をシェアさせてくれたことがありがたくて涙が出たのです」と伝え、私たちは抱き合った。

3. 今後に向けて

加害側と被害側が過去を分かち合い、共感の文化を創造し、苦しみから意味を創造することは非常に困難な課題であるが、最終日、日中の若者たちが手をつなぎ慰霊する姿を見て、希望

を感じる事ができた貴重な第一歩となった。このような試みを単発のイベントに終わらせるのではなく、自然な日常生活の流れの中に組み入れていくことの重要性を感じている。イベント参加者のなかでも、日常の授業や研究会を通じて問題意識を育ててきた参加者の方が、体験は深く根付きやすかった。南京ワークショップは2011年度、再度、開催を予定している。

心理学的には、暴力によるトラウマは人々のつながりを破壊し孤立させる。これに抵抗するためには、つながりの回復が必要である。過去、現在、未来をつなぐこと、他者とつながること、世界に開かれること。また、個人史と歴史をつなぐことが鍵になるのではないか。それは、とりもなおさず、個人のなかの暴力性と歴史のなかの暴力性をつないで見ることだろう。広い文脈のなかで一見無関係に見えるものをつながりのなかで見えてみることを、学際的、国際的なつながりのなかで、是非とも継続していかなければならないと考えている。2000年の国際女性法廷で国境を越えてつながり、世界に力強く正義を発信していく先輩女性たちのパワーに感動したことは、今も私の大きな力の源になっている。

参考文献

Connerton, P. (1989) *How Societies Remember*. Cambridge Press.

本田勝一（1997）『南京大虐殺』朝日新聞社

村本邦子（編著）『臨床人間科学オープンリサーチセンター・ヒューマンリサーチサービス19 戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性 ～国際セミナー「南京を思い起こす2009」の記録』立命館大学人間科学研究所（2010年1月）

http://www.ritsumeihuman.com/hsrc/resource/19/open_research19.html

